

# 六 花

り  
つ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai  
designed by masami

8月号

一



六

甲

てのひらに寝かせて見せし囀鮎

払はれて水に落ちざる蜃かな

振花眠たくなつてしまひけり

梅雨滝に石の混じれる音したる

夏 鶯 孝 徳 天 皇 勅 願 寺

蓮の葉の水睡蓮にこぼれけり  
割箸を挿し込んであり蟬の穴  
ひとかけら氷入れやる金魚玉  
草の葉の裏にまはりし蚩かな  
泣<sup>なき</sup>寄<sup>より</sup>に冷やされてをり真桑瓜  
かなかなに途方に暮れてしまひけり

偲草

青柿や享子の句碑をまだ訪へず

青 鷺

灯火に燃えて闇へと雪消ゆる  
起きあがりこぶしのやうに池の鴨  
水涸れの池に青鷺降り来たり  
立春の小雨の中を歩くかな  
如月や土の匂ひと雨音と  
出汁に浮く温泉卵春隣  
焦げ跡を取り巻き野火の広がれり  
早春の怒濤を聴いてをりにけり  
春の泥轍わたちに光滲み出づ  
日脚伸ぶ猫伸びをして近寄らず

田水張り対岸の声透きとほつ

木内美保子

風に揺れ風と流れて深山藤

潮風が大地揺さぶる麦の秋

ががんぼの当たり散して足落とす

友の死を風に聞きたる夕螢

田水を張ったことによつて声が透き通つたというのは原因結果を詠んだように見えるがそうではなく、声が透き通るところが強い主観写生になつて因果関係を思わせない。対岸の景色とか、灯とか実景を詠むと逆に因果関係が強くなりかえつて句を浅くする。そこを外して声を詠んだところにこの句の佳さがある。このような主観写生の句は名句といわれるものが多いのである。

風

木内美保子

風に揺れ風と流れて深山藤  
潮風が大地揺さぶる麦の秋  
ががんぼの当たり散して足落す  
友の死を風に聞きたる夕螢  
田水張り対岸の声透きとほる

菖蒲太刀

笹村 政子

菖蒲太刀なんなく折れてしまひけり  
入院の小分けにしたる新茶かな  
新樹冷ワイングラスの薄き疵  
バックして薔薇に近づく車椅子  
会釈して人の過ぎたる薔薇の園

# 檜木集

老桜 佐原 正子

風花や散歩の足を緩めたる  
車窓ごし三分咲きなる花の城  
支へ木が見守られをり老桜  
梅が香や野点の席の静けさに  
霞かな夫婦滝ある庭にゐて

芽 岩松 八重

動き出す 三井 孝子

芽吹きかな猪苗代湖は薄々と  
新緑と呼ぶには幼な芽吹き道  
はじけだす時なり風の光る時  
蓬摘む姑の手際のみかりけり  
舌打ちつ書く礼状や春の宵  
夕暮れを植田となりて映しけり  
昼すこし過ぎて終へたる草むしり  
沙羅の花音なく人の来たりけり  
子に貰ひ子には返さじ春の風邪  
代田掻き子のをらぬ村動き出す

# 六花集

山田六甲選

平居 滯子

新緑のやさしき重さ聖五月  
麦の穂の伊吹の風に揺れやまず  
筍のそばにごろりと横になる  
ふり向けば海せりあがる立夏かな  
母の日を病後の夫と分かち合ふ

わかやぎすずめ

菊谷 潔

田水張る夢前の水満ちており  
新緑に視線そらしてしまいけり  
五月雨や流されてゆく我が心  
風薫る遠くへと旅したかりき  
雨蛙わたしの代わりに鳴いており

黄鳥<sup>うぐいす</sup>の何吐き出すや一節に  
ひもすがら舞うて過ごせる蝶々かな  
かそけくも名もなき山の春の風  
五月雨や雲霧木々の合間より  
行く春や楓に通ふ風の音



はじけだす時なり風の光る時

岩松 八重

「だす」という言葉に注目してみた。①自らの意志を示す場合と、②勢いづいて盛んになる様を表した場合だ  
が掲句、この2つの意味合いが絡まっているように思  
え、まさに風が光って感じられる晴れた春の日の中に行  
動的な意志を感じる。はじけ方はいろいろあるう。

支へ木が見守られをり老桜

佐原 正子

老いた桜樹の支え木がそろそろ朽ち始めた。本来は老  
いた桜の方を人々は心配するのに本末転倒で、支え木が  
折れないかハラハラしているのだ。桜守も早く取り替え  
ておけばよかったかも、と後悔しているのではないかな  
ど想像が広がる。

沙羅の花音なく人の来たりけり

三井 孝子

沙羅の花に見入っていたら気が付かないうちに側に人  
が来ていた。それほど沙羅の花には静謐で周辺を凜と  
させる空気が漂う。また沙羅の花を育てて咲かせるには  
それにふさわしい庭であることも必要だが、沙羅の花そ  
のものが庭や人間をも変えてしまうほどの気が立ち上る  
花である。沙羅の花が「音なく」にかかるのではなく、  
一旦ここで軽く切れる。そして「音なく」は「人の来た  
りけり」を修飾して「けり」で完結する。

ほんものの葉に包まれり柏餅

池崎るり子

改めて川巾を見る春出水

いば 智也

掲句は惜しいと思う。改めて川巾を見るのは春の出水  
によって増水したから、という原因結果が明白で、作者  
の意図が表面に現れ句の広がりや力を弱めてしまったの  
である。もし、「春の水」とすればたちまちに秀句とな  
りうるのと思う。だから惜しいのである。

玄関のペンキ塗りたて梅雨じめり

角田 信子

掲句も惜しい。いばさんと同じで、梅雨で湿っているからペンキがなかなか乾かないという計らいが見えると意地悪い読者は皮肉に掲句を観てしまうから作者は損をしてしまうのである。もったいない。もったいない。

岩燕目で追ひたるも追ひつかず K O K I A

岩燕の早く飛ぶ姿を目で追いつけないほどであると言った。つまりは目で追えないほどの速さであると詠んだ句。素早い様子は慣用に「目にも留まらぬ」とい表現もある。岩燕の速さを詠んでいるようでありながら実は自身の目の衰えの嘆きも気持ちの隅にあるのかもしれない。

薔薇の束橋の快に置かれたる 信崎 和葉  
花つけしあふちの大樹鎮もれる 武田 美雪

向き替へて鏡の中の青葉かな 馬場美智子

青葉の頃はすでに陽光が充分で、普段暗い化粧部屋などもこの頃には随分と明るく感じるのである。まして、鏡台の鏡の向きを少し替えるとならまに鏡に映った青葉が一層明るく映え、心まで新緑が染むような心地にな

るのだ。馬場さんは鏡の句が上手いが「向き替へて」の「て」が原因結果をつよくしているので工夫を要す。

手甲より白きゆび先新茶摘む 松下 幸恵  
舟過ぎて繋がりにつけり花筏 松本文一郎

玉砂利の響き合ひみる梅の園 宮森 毅

梅の匂いや色を言わず玉砂利を踏む音の方へ微妙に外していて地味ながらいい句。桜では出ない微妙な味の句とおうか、玉砂利の響き合いには梅を愛でる人と人との心の響き合いでもあり、歩く速度や玉砂利の敷いてある場所なども読者には想像が容易につくのである。

麗らかや上辺繕ふ会話さへ 物江 昌子

田水張る夢前の水満ちており わかやぎすずめ

夢前は兵庫県夢前町から姫路にかけて流れる河川で、故加藤三七子氏は兵庫県には佳い地名が多いと言い、その中の一つに夢前も含まれている。その地名を生かした句。